

英国のアーツカウンシルは日本の芸術文化政策のモデルとなりうるか？

～『アーツカウンシル50年史』から見たアーツカウンシル運営の現実～

アームズレングスの原則を掲げる英国のアーツカウンシル (AC) は、日本においても芸術文化政策のモデルとしてたびたび取り上げられてきた。しかし、その運営の詳細はあまり明らかにされてこなかった。

AC の運営の詳細を検討すべく、早稲田大学演劇博物館 GCOE 芸術文化環境コース研究会「芸術文化を支える制度」では、AC の50年史である『Arts and Cultures』の講読を行ってきた。

本ポスターセッションでは本書の記述をもとに作成した年表の一部 (→) と、各章の要約 (↓) を示すことから、本研究会の成果報告を行う。

第1章 The Arts and the War (1939-46)
戦中の CEMA を発展させて、プロパガンダにならずにプライベート・イニシアチブと国家支援の協働の形で芸術を支援する AC が設立された。

第2章 The Best and the Most (1946-51)
AC はナショナルな文化に含まれる複数の地方文化を認め、限られた資源で首都と地方の最善の芸術を最大限に支援しようとした。

第3章 Few, but Roses (1951-55)
AC は芸術を幅広く普及することよりも国として芸術の優れた水準を維持・向上させることを優先し、中央集権を図った。

第4章 The Struggle for Survival (1956-63)
資金不足のため、AC の当面の課題は生き残ることであったが、それでも AC は国家や政治からの距離を維持できた。

第5章 More Money, More Opportunities (1963-66)
いまだかつてない予算の増加から、資源配分の基準やプロセス、配分の対象が議論に挙った。

	アーツカウンシル関連の出来事	** 英国社会の状況
1945-	1945- / 6月12日、下院にてCEMAがACという名称での継続を宣言=ACの設立。教育省ではなく大蔵省が責任を負う、プライベート・イニシアチブと国家助成の混合 AC初代議長: Lord Keynes (-46)、AC初代事務局長: Mary Glasgow (-51)	** the Council for Encouragement of Music and the Arts (CEMA) への政府予算 175,000 ポンド (44-45)
1946	3月(イースターの日曜日)、Keynesが心臓病にて死去(この段階ではまだ彼が望んだ Royal Charter 上の AC の根拠は明記されず) / 8月9日、ACの存在が Royal Charter によって保障される / Keynes 起草の Royal Charter of the new Arts Council の規定により、以後 19年間、文学、映画、コミュニティアートなどが国の支援から除外 / AC初めてのフルイヤーオペレーション (予算 235,000 ポンド)、Keynes のオペラ・バレエへの選好が反映 / 第2代議長に Sir Ernest Pooley KCVO が就任、カウンシルとパネルの組織編成 / AC 本部はウェールズ地方事務局代表に Huw Wheldon を任命 (Wheldon は地方色を出そうとし、ウェルシュ・カウンシル創設を希望)	** ロイヤル・バレエ、アメリカ公演の成功 (戦争末期には欧州各国を巡業)、コヴェント・ガーデン歌劇場再開 (戦時中はダンスホール)
1947	エディンバラ・フェスティバルが創設 (AC がこれを支援)	
1948	労働党は AC 予算を 3 倍に増加、音楽パネルからバレエパネルが分化して成立、オールドバラ音楽祭が創設 (AC がこれを支援)	** 地方自治法 (The Local Government Act) によって地方自治体の芸術への支出が可能に
1951	Festival of Britain 開催、その一環でロイヤル・フェスティバル・ホール開場。2,000 に及ぶ地方イベントに 1,800 万人が訪れた / AC は芸術 (建築、絵画、彫刻)、映画、文学、演劇、音楽の各分野を支援、地方自治体とのパートナーシップにより大小のフェスティバルを開催 / AC は 5-6 月のロンドン・シーズンの促進に協力、AC 予算の急増 (特に舞台芸術)、Festival of Britain への助成によっても予算は増加	
1952	William Emrys Williams が事務局長に就任 (中央による統治体制が信条) / 地方のオフィスが閉鎖され始め、3年後にはすべてのイングランドのオフィスがなくなる	
1953	年次報告書において Theatre Grid (大都市の劇場間の協力体制) の計画が示される → Housing the Arts とレパートリー劇場のネットワーク化が課題に	
1955	Sir Kenneth Clark が新議長に就任 (Independent Television Authority の議長も務める)、しかし実権は Williams 事務局長	
1950s 後半	地方オフィスの閉鎖に伴い、(craft & local activity 中心の) Regional Arts Association (RAA) を支援 (しかし、政策は中央集権的で、首都中心的)	
1956	1956-57 の AC レポート: 年間 100 万ポンド以下の厳しい予算	
1959	Housing the Arts に関するレポート出版 (1961 年にも)。実行されるのは 1964 年労働党政権以降	
1960	年間予算が 150 万ポンドに到達 (それでも国民一人当たり 7 ペニーで、ヨーロッパ最低水準) / 議長の交代: Sir Kenneth Clark から Lord Cottesloe へ / AC パネルに変化: 実行者 (doers) から、行政・管理者 (administrators) へ / AC の最大の問題は、不十分な助成金と合併・統合計画の失敗による Opera Crisis。AC のオペラ偏愛 (予算の 50% 以上がオペラに) も批判され、Lord Bridges は国会における分離予算決意 (オペラ & バレエ / その他) を提案したが、この提案は採択されなかった。 / 1960 年代、Willatt は学生運動 (Youth Revolution) 期に生じた不平は重視しなかった。評議会の仕事は無償のため、それを可能とするブルジョア、ジェントリ、金持ちの好む傾向	** この頃のメディアの成長の影響で、地域劇場の苦戦 (全英で 51 ヶ所だけが残存) → Theatre Grid と Housing the Arts がより切迫した問題に
1960-	事務局長の交代: Sir W. E. Williams から N. J. Abercrombie へ。 / Williams が公務員 (civil servant) によって議長を交代	
1964	** 5月、労働党による document の The Quality of Living は Royal Charter 以来の重要な白書 Policy for the Arts の基礎となる。保守党政権下、過去 5 年間で行ったことの反対の記述。Senior Cabinet Minister が拡大した Arts Council と新たな Sports Council へ責任をもつべきである、と勧める。	
1965-	** 芸術大臣: Jennie Lee (-70) / 2月、Policy for the Arts は労働党政権の政策の具体化したもの: 「もっと寛容で、際立った援助が地方、地域、国家的に緊急で必要とされている」と述べる。 / 財務省から教育科学省 (the Department of Education and Science: DES) へ権限を移す (DES 大臣が芸術への特別の責任)	
1965-72	議長: Lord Goodman	
1967	AC は絶頂期を迎えた。助成金の範囲拡大のために Royal Charter 改正。組織における諸部門の委員枠を拡大し、各部門の充実を図る / AC は新しい劇場の建設 (Coventry、Birmingham、Bolton、Edinburgh など計 13 劇場)、劇場の大改装 (4 劇場)、レパートリーの保護 (7 劇場) を行っていく	
1968-	事務局長: Sir Hugh Willatt (-75) / 議長 Lord Goodman は AC 委員に若いメンバーを任命、the Select Committee (議会の特別委員会) は Grants for the Arts において、AC の支援を脱中心化、RAA を通じて働きかける、直接国家的な問題や組織へ関わるものへ集中すべき、と進言	
1970	1960 年代の AC の特徴は、芸術の「質、多様さ、そして普遍的なおおらかさ (Catholicity)」(背景には 25 年間の AC の継続的な予算増額)	
1970	** 15 年間で全般的な芸術ルネッサンスがあった。保守党が第一党 / Senior Minister (上級大臣 Paymaster General として、通常の大臣より広い責任を負う) : Lord Eccles が芸術大臣に指名される / 大衆・工芸・地方・市場を愛する Eccles による、脱・Goodman 路線 (卓越性重視・中央集権・エリート主義) 宣言	
1972	1972-1973 の AC レポートでの言及により、年間助成金 200,000£ の増額。地方の田舎で使用できる資金が増える / 議長職最後の年、Goodman は、1971-72 の助成金 1190 万£ と、前年の 4 分の 1 以上の増額を背景に、芸術大臣 Eccles に従うことを強いられた / 議長の交代: Lord Goodman から Patric Gibson へ (-77)	
1973	金融危機にもかかわらず AC 助成金前年比 15% 増し (これを最後に予算上昇はストップ)	
1974-76	** 芸術大臣 Hugh Jenkins の任期内の施策: カウンシル内に地方政府代表を置く。任期中継続的に財務省から予算獲得。公貸権の法制化失敗	

第6章 The Furnishings of a Capital City (1967-70) AC は助成金の範囲拡大や組織の拡充などによって、様々な芸術分野に対してその影響力を増大させていった。

第7章 Ye Best Things in Ye Worst Times (1968-75) 経済停滞の中で助成額が伸びた黄金時代は、増額による政府介入を招き、芸術のための AC の独立性は失われていった。

第8章 Devolution and Defence (1972-79) 各地方への権限委譲が論議されるとともに、AC は「文化の民主化」と「文化の民主主義」の異なる価値観の間で揺らいだ。

第9章 Arts Abroad (1976-) AC が歴史的に他国の模範となったと同時に、英国も米国を模範として企業助成へのシフトを試みた。

第10章 Cuts and Changing the Guard (1981-84) 政府支出は低下し、自由経済の論理のもと企業助成が重視された。

第11章 Culture, Cost and City Need (1983-87) AC が経済的な効果を重視するようになる。都市再生などの観点から説明が行なわれ、マイノリティなどへ政策対象が広がった。

第12章 Holding On (1989-94?、主に1989-90) 芸術が都市再生や社会福祉や地方対中央の問題として議論され始め、政治から距離を保つアームズレングスの原則が危ぶまれた。

第13章 Foreign Examples (1986-93) 国際比較調査で英国の芸術支援策が相対化され、冷戦構造後の「文化」価値変化により卓越した基準と質を求める AC の存在意義が崩れた。

第14章 Art is Political (1990-1992) 政府の関与が強まり、AC は納税者の奉仕者とみなされ、芸術戦略の決定権は政府に委ねられることになった。

第15章 Historically Correct(1993-1994) 予算削減に対する一貫性のない政策で AC は非難されたが、その原因は AC 自体の欠点よりも政府の要求にあった。

1975	S.H.Willatt 事務局長を引退。任期中は 5 つの領域が拡大：スコットランドとウェールズ（助成と不干渉により 1970 年代になって文化が花開いた。1975 年はスコットランド芸術助成の頂点）、R A A、地方の田舎でのオペラとダンス、訓練、アートセンターおよびその他地域プロジェクト。任期中の 7 年間で助成金の総額は 3 倍になった。
1976-	<p>**Association for Business Sponsorship of the Art (ABSA) 設置。Lord Goodman が初代議長に就任 / 報告書「ミュージアム・システムのための枠組み」=財政難にあるミュージアムのために 30 の提言 / 芸術大臣 Lord Donaldson の任期中の施策 (-79) : ナショナル・ミュージアム&ギャラリー購入費増、ブリティッシュ・ライブラリー新スキーム、National Heritage Fund 創設</p> <p>海外の芸術家、企業、展示の英国への訪問に援助開始 by BC、AC、Foreign and Commonwealth Office、Gulbenkian Fondation Lord Redcliffe-Maud 報告書 Support for the arts in England and Wales。芸術と教育を結びつけ、慎重ながらも地方への権限委譲を提案</p>
1977	<p>**労働党政策文書 The Arts and the People AC 年次報告書：Value for money。ハイ・アートを一般の人々が享受できるようにあらゆるレベルでの教育を重視する提案 / 議長：The Rt Hon.Kenneth Robinson</p>
1978	<p>**English National Opera North がリーズに創設 事務局長：Sir Roy Shaw (-83)「支援と責任 (Patronage and Responsibility)」「卓越した芸術を手の届くものに (Excellence and Access)」を主張、コミュニティ・アートに懐疑的 / このころ欧州審議会が広めた概念である「文化の民主主義」を実践するコミュニティ・アーティストが増える / AC 内でも芸術の価値はすべて個人的なものとする意見が目立つようになる。</p>
1979-90	**Thatcher 政権下で、公的パトロネージュからビジネス/私的パトロネージュへのシフトが進む
1983	Luke Ritter が事務局長に就任
1984	(放送と出版を除いても) 芸術へ数十億ポンドの利益、間接的な効果も入れれば 40 億ポンドと考えられていた / Bussiness Sponsorship Incentive Scheme 設立
1980s 半ば	AC が Partnership: Making arts money work harder を出版。過去 40 年間の「文化産業」の伸びを指摘。芸術の費用効率性を重視
1980s 後半	AC に Film, Video and Broadcasting のパネルと部署、Marketing/Film, Video and Broadcasting/Plannig の 3 つの部署を新設
1985-86	写真、黒人とアジア人の芸術、教育、コミュニティアート、アートセンターとダンスへ高い優先順位を置く。AC はこのようなプログラムへ大きな権限を RAA へ委譲することを歓迎する (AC 発行のレポート 1985—6 : Most of the Regional Arts Association)。
1988	年次報告書 (1987—1988) :「私たちは消費者の判断を官僚や専門家の判断と同じ高さで評価することへ到達した」(Rees-Mogg 議長の言葉) / John Pick 'Public Funding and the Arts' :AC の方針を本来の目的を失うとして批判 / Lord Rees-Mogg 議長は 1988—89 に黒人芸術へ 50 万ポンドを追加配分
1989-	3 月、Rees-Mogg の議長辞任、後任に Peter Palumbo 就任 / Wilding Report Supporting the Arts、AC の地方への権限移譲を要求 **人頭税・コミュニティ税の導入と反発 (-90)
1990	<p>**グラスゴーが欧州文化首都に選出。都市再生と芸術を結び付ける国家の新たな政策の方向性に先鞭 / 芸術大臣交代：Richard Luce から David Mellor へ。Mellor は地方分権に対して積極的ではなかったが、以後、芸術の予算を増加させていく(ただし、芸術の国家的戦略は政府の仕事と考える) / 11 月末、Thatcher 首相退任、Major 政権へ / David Mellor 大蔵主席国務大臣に。大蔵省で芸術助成に取り組む / Timothy Renton が芸術大臣に (地域を重視)。芸術大臣の選好によって、AC の予算配分が変わることが明らかに / 1990 年代初頭、スポンサーシップが政治的関心を集める</p> <p>事務局長：Luke Rittner (1983-1990)から Anthony Everitt (1990-1994) へ / 3 月に最後の Housing the Arts programme の劇場 West Yorkshire Playhouse が 1300 万ポンドでリーズに設立された。 / AC が過去 30 年続けてきた国主導の演劇センターの最後の事例となった。 / Cultural Trends (Policy Studies Institute) による過去三年の芸術とミュージアムへの直接公的支出の 7 カ国国際比較</p>
1992	<p>**英総選挙：保守党勝利 総選挙の争点として芸術が真剣に議論された。 / 国家遺産省 (Department of National Heritage) 創設。いくつもの省に分かれていた芸術の諸部門が統合されるとともに、政府による芸術へのさらなる関与を約束 (以後、AC 予算は厳しい条件下に置かれることになる) / Mellor、国家遺産大臣に (4/11-9/24) Peter Brooke、国家遺産大臣に (9/28-) / 国家遺産省、財政的に圧迫される (予算削減&行政費用増加)</p> <p>芸術大臣 Renton が AC の権限縮減を狙った政府直接助成の動きに対し、5 人の AC 元議長と John Burgh が Time 紙に反対表明 / AC が Digest of Toward a National Arts and Media Strategy を公表 → 国家遺産大臣に提出される。 / ウェールズでは、Film grant が 3 倍に増加 (-93)</p>
1993-	<p>**A Creative Future: The way forward for the arts, crafts and media in England 公表 / The Lottery Bill 可決、National lottery から芸術に資金 (年間 7 千万£) 翌年度 AC 予算 5 百万£削減決定 (後に 80 万£は回復) / the Woodstock meeting で AC は予算削減への対応方針を公表 (苦痛の分担よりは、犠牲者を選ぶことに) / 国家遺産省が Price Waterhouse に AC の会計監査を依頼→構造変革を要求 / オーケストラの支援中止問題で、AC に厳しい非難、前芸術大臣 Timothy Renton は AC 廃止論を主張 / AC が積極的に取り組んだのは、excellence の維持よりも innovation (cf. 1992-3 年の年次報告書) / 100 万£以上の予算が The Arts Foundation (実験的な芸術を奨励) に / AC は、the London Arts Board とともに the Institute of New International Visual Arts を設立 (多様なイギリス・カルチャーのための空間) / スコットランドでは、スコットランド芸術のための Charter が出現 (副題は Art for a new century) / AC の内部報告で、意思決定における不透明性が指摘される。 / Anthony Everitt、資金削減に対する AC 政策の大失敗の責任をとり事務局長を辞任し、head of the executive へ / the Millenium Map of Need の計画</p>
1994	議長交代：Palumbo から Earl of Gowrie (前芸術大臣) へ

出典：Andrew Sinclair, Arts and Cultures: The History of the 50 Years of the Arts Council of Great Britain , Sinclair-Stevenson, 1995

作成：早稲田大学演劇博物館グローバル COE 「演劇・映像の国際的研究拠点」芸術文化環境研究コース「芸術文化を支える制度」研究会

メンバー：小林真理、長嶋由紀子、稲木徹、蒲池卓巳、金牡蘭、佐藤良子、佐藤李青、中村美帆、新藤浩伸

日本文化政策学会 第3回年次大会 ポスターセッション 筆頭者：佐藤李青 resay71@hotmail.com